

銀座水族館 (七つの海の魚および水産切手)

—(22)—

東京支店 神原 勇

カツオノエボシ

分類 クダクラゲ目 カツオノエボシ科

学名 *Physalia physalia utriculus*

英名 Portuguese man-of-war

和名 カツオノエボシ・デンキクラゲ

カツオノエボシは一名デンキクラゲとも呼ばれ盛夏の候各地の海水浴場に大挙して出現し被害を与え、新聞記事を賑わす。世界中の熱帯・亜熱帯海域のどこにでも普通に見られ、帆船の帆が風をはらんだような浮体(気胞体)によって風や海潮流によって、遙かはなれた暖海にまで運ばれる。日本の太平洋側には黒潮や南の卓越した季節風によってカツオの漁期が始まる4月~5月頃から見られる。

他のクラゲが個体であるのと異り、群体と呼ばれる多くさんの個虫からなりたっている。即浮袋のような気胞体、その下に長く垂れ下がり刺胞をもった触手、口があって栄養補給を司る栄養体、生殖体等から構成され、全体としての色彩は鮮やかな青藍色である。

海中でこのカツオノエボシに触れるとミミズばれとなり、やがて赤くはれあがり可成りの痛みを伴い、体質によっては長期に亘り傷のあとが残る事もある。カツオノエボシが海岸に打ち上げられ、強い直射日光により乾燥してしまったものでも手や体に触れると痛みを感じることもある。

刺胞を多くさんもった触手で海表面近くの小魚を捕食するが、小魚に触れると刺胞から刺針が発射されて毒液が注入される。麻痺弊死させた後群

体のうちの一つである栄養体の口から少しづつ食べていく。しかしこの毒に対して免疫をもっているものと思われるものにエボシダイがあるが、このエボシダイはカツオノエボシが捕えた小魚を横取りして生活しているものと思われるが両者の共生関係は未だ十分に解明されていない。刺胞にさされてエボシダイが死んだり、エボシダイが触手をかじったりする事も観察され、きびしい生存競争が展開されている。

カツオノエボシの青藍色のビニール袋状の浮体即気胞体はうすく、軽く、丈夫に出来ていて浮く役目をするほか、背面の部分は餃子の皮に中身を入れた手のあのような形をしていて、これが帆の働きをするので風による進行移動が行なわれる。

カツオノエボシの和名の由来はこのクラゲが日本南岸に現れると“カツオがエボシ(烏帽子)をぬいだ”として初カツオ釣りに出漁するところからきていて、黒潮の消長とカツオノエボシとの関係を如実に物語っていると共に、海上生活を男子に託す海のロマンと夢のある親しみにあふれた名称である。これに対して英名の“Portuguese man-of-war”はポルトガルの軍艦の意で、15~16世紀に大西洋を所せましと暴れ廻ったポルトガルやスペインの快速帆装軍艦の形に似ており、軽快な形にもかかわらず毒針で武装していることにも由来するが、和名に比してかなり即物的で、そのものずばりの感が深い。

カツオノエボシ

分類 : クダクラゲ目 カツオノエボシ科  
学名 : *Physalia physalis utriculus*  
英名 : Portuguese man-of-war  
和名 : カツオノエボシ、デンキクラゲ

全世界、熱帯魚熱帯海域が主ドコトモ見ラレル。鮮青色ノ帆船ノ  
帆ノ形状ノ浮袋ニシテ凡及海流ニ依リ遠隔ノ地ニ運バレル。日本南岸ノ海水浴場  
ニ夏大賑ノ時齊セテ海ニデシテクラゲトシテバレルモノアリ。  
刺胞ヲ多クサシメテ触手ヲ海表面近クノ小魚類ヲ捕食スルガ、コトモ免疫ヲ  
モツモノニエボシダイガナルコトノ共生関係ハ充分ニ解明サレテケイ。



メシバ -1964-



メシバ -1953-



メシバ -1953-



メシバ -1969-



メシバ -1953-